



「あはれ」を知るようになる物語

「竹取物語」を入試文学史的に？整理すると、次のようになる。

*

○伝奇物語 作者・成立年とも未詳

○内容と構成

- 1、かぐや姫の生育部分 3年
- 2、求婚譚 3年
 - ・石作の皇子（仏の御石の鉢）
 - ・倉持の皇子（蓬萊の玉の枝）
 - ・阿倍の右大臣（火鼠の皮ぎぬ）
 - ・大伴の大納言（龍の頸の玉）
 - ・石上の中納言（燕の子安貝）
- 3、帝の求婚と昇天 3年

○「物語の出で来はじめの祖」

*

授業で話たように、この物語では「3」が聖数的に用いられている。全体の構成も、三部構成として捉えてみる事が可能である。しかも、こうして構造化してみると、それぞれのパートの年月も3年になっていて、なかなかおもしろい。そういうこともあって「2 求婚譚」の部分も、もともとは求婚者が3人で展開する物語だったのではないかと推測する研究者もいる。

月（異界）からやってきたヒロインが、人間界で変化を遂げて再び月（異界）に還っていくというこの物語のパターンは、例えば、浦島太郎が人間界から竜宮城（異界）へと出かけて変化を遂げ、再び人間界へと還っていくという物語と反対の関係にある。そういう観点からこの物語を捉えてみても面白い。

短い物語だし、よい文庫本（角川ビギナーズクラシック）などもあるので、ぜひ余裕があったら読んでみてほしい。全部はキツイという人には、教科書にも採り上げられることの多い、最後の昇天の場面だけでも読んでみることを勧める。（ちなみに、角川ビギナーズはダイジェスト版で、しかも、現代語訳や簡単な解説もついているので、これで最後の場面を読むと分かりやすい）。

最後の場面でかぐや姫は帝に手紙と不死の薬を残すのだが、その手紙の中の歌が

今はとて天の羽衣着る折ぞ
君をあはれと思ひ出でける

である。

係り結びが使われているが、それによって強調されている語は「着る折」、つまり、人間の心を失ってしまう（「心異になるなり」）瞬間である。「その瞬間にしみじみと思出すのは、あなたのことなのでしたよ」という歌で、最後に気づいた感動を表す詠嘆の「けり」が印象的に使われていて、なかなかイイ歌である。

月からやってきた身長10センチだった姫は、人間の世界でおじいさん・おばあさんと暮らし、五人の男から求婚され、さらには帝から抱きしめられることによって、「あはれ」を知る存在へと変化した。帝への手紙を早く書けとせかす天人に向かって、「もの知らぬこと、なのたひそ。」ときっぱり伝える姫の姿には、「あはれ」を知った一人の女性としての姿が伺えるのである。